我が国のソーシャルワーク専門職の価値志向尺度の開発

○　西武文理大学　　氏名　西川　ハンナ（4997）

キーワード：　価値志向　尺度開発　社会福祉士

１．研 究 目 的

社会福祉サービスの需要に応え、多様な人材の参入や社会福祉サービスの効率化・利益の追求を優先し、人権侵害や福祉過誤が生じている。ソーシャルワーク専門職の価値基盤は健全なソーシャルワーク実践の重要な要素とされているが、価値に関する科学的な実証研究は少ない。価値の直接的可視化は困難であるが、価値は態度となり志向や見解に現れ行動となる(Meddin 1975）ことから、見解から価値志向を測る尺度の開発が試みられている(Abbott1999・西川 2009)。そこで、本研究は我が国のソーシャルワーク専門職の専門価値を、価値志向を持って測る尺度の開発を目的とする。

２．研究の視点および方法

本調査の価値志向とは、専門家が専門職としての社会化の過程で内在化した社会福祉の規範的価値が基準となって形成される行為の方向性と定義する。

（１）質問項目の作成過程

ソーシャルワーカーを国家資格である社会福祉士として、623 名を対象に予備調査を行った。結果「対人援助感」「社会貢献」「社会正義」「専門職としての姿勢」4 因子 15 項目からなる「ソーシャルワーク専門職の価値志向性尺度」(2009 年)とした。しかし、その後社会福祉専門職の資格の先鋭化、社会情勢の変化それに伴う社会規範の変化等をうけて専門職への連帯感を問う 2 項目、予備調査の結果から削除した 9 項目を再検討し加え、より見解を問う質問へワーディングを行い。26 項目の質問項目を作成し「全くそう思う」から「全くそう思わない」の５件法を用いた。

（２）調査対象と分析方法

対象は予備調査と別の都道府県社会福祉士会支部会員 2552 名。性別・教育歴・大学の専攻・職域・社会福祉実践経験等基本属性を尋ねる質問 20 項目と尺度項目 26 項目を記載したアンケート用紙を郵送にて配布。実施期間は 2013 年 1 月から 2013 年 2 月。分析は、尺度については探索的因子分析を行った。因子間に相関があると考えられることから、主因子法プロマックス回転を行った後､尺度の信頼性は Cronbach の α 係数の算出による内的整合性の検討を行った。統計ソフトは SPSS Version22 を用いた。

３．倫理的配慮

本調査はルーテル学院大学倫理委員会において承認されている（承認番号 12-42)。また、

対象団体理事会においても目的と内容を説明し調査実施の承諾を得た。

４．研 究 結 果

（１）基本属性

回答数825通の(回収率32.3%)　有効回答816通(98.9%)　男性265人(32.2%)女性558人(67.8%)　平均年齢46.8歳(SD11.52)　福祉の経験有787(95.6%)無36(4.4%)であった。

（２）因子分析

調査票 26 項目の平均値、標準偏差を算出し天井効果、フロア効果を示す項目は見当たらなかった。そこで26項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化(6.17, 2.18,1.59,1.44,1.12,1.01・・・)と因子の解釈可能性と予備調査結果を考慮すると 4 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度 4 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行い、十分な負荷量(4.0)を示さなかった項目を外した。第 1 因子は 5 項目で構成されており「人を助けることには充足感を伴う」「困っている人を見ると放っておけない。」といった人に対しての援助者のかかわり、相互作用について述べている項目群なので「人との関わりの実感」因子と命名。第 2 因子は 5 項目で構成されており「職業を通しての社会に貢献するべきだ」「社会にとって欠くことのできない仕事をするべきだ」といった人への援助は社会に役立つ仕事であるという職業感から「社会貢献のできる職業」と命名。第 3 因子は 7 項目「社会で虐げられている人がいることに憤りを感じる」などソーシャルワーカーが倫理綱領の価値原則である差別、貧困、抑圧、排除等の無い、自由、平等、共生に基づく社会正義の実現を志向していることを示すので「社会正義の実現化」と命名。第 4 因子は「社会福祉士であることに連帯感を抱く」「同じ専門職に連帯感を抱く」2 項目から構成され、ソーシャルワーク専門職の実践に関する意識の上で繋がっていることを示すので「専門職の責務に関する連帯感」と命名した。内的整合性を検証するためα係数を算出したところ、α係数 0.70～0.80 と十分な値が得られた(前回 0.57～0.81)。予備調査時の項目に 5 項目が新たに加わり、1 項目が削除された。

5. 考 察

因子分析の結果、予備調査と本調査とも4因子が抽出され項目を厳選し最終的に19項目となり完成した。連帯に関する質問項目を新たに加えたことにより、「社会貢献のできる職業」因子は単なる社会貢献ではなく援助が公共の福祉に役立ち、それが誇りにもなるという職業感で構成される形となった。また、因子名もより、理念に留まらず大切な価値に向かって**行動する**ことを意識した。本尺度の「社会貢献のできる職業」「専門職の責務に関する連帯感」因子は我が国のソーシャルワーク専門職の現状を反映していると考えられることから、国際ソーシャルワーカー連盟のソーシャルワークの、国際定義の見直し(2014年7月採択)に伴い、その定義は各国および各地で展開することとなった現在、重要な要素と考える。今後さらに項目間の相関や因果関係の分析を進めていく。